

中国における非公認教会(家庭教会)の福祉的取組と専門職信徒に関する調査

○ 同志社大学 羅 傑夫(010049)

[キーワード] 中国非公認教会、福祉的取組、専門職信徒

1. 研究目的

本研究の目的は、中国における家庭教会の専門職信徒へのオンラインインタビュー調査を通じて、まず家庭教会の専門職信徒の基本状況を整理し、その上で、専門職信徒の視点から家庭教会の教会内外の福祉的取組に対する考えの特徴を明らかにすることである。

2. 研究の視点および方法

中国のプロテスタントキリスト教会は、主に『三自愛国教会』と呼ばれる公認教会群と、非公認教会群である『家庭教会』(以下：家庭教会)に分かれている。家庭教会では、設立当初は教会堂がなかったため、集会は主に信徒の家で行われた。そのため「家庭教会」と呼ばれた。家庭教会は宗教的な意味での宗派や統一組織ではなく、中国の特殊な状況下で生まれた政治的な概念であり、地域や国家の組織からの指導を受けず、互いに完全に独立している組織である。

家庭教会の福祉的取組は信徒や地域社会の非信者に対して提供する経済的、物質的、精神的、および社会的な支援活動を指す。これらの取組は、キリスト教的価値観に基づき、特に弱者や困難を抱える人々のニーズに応えることを目的としている。現在、家庭教会の福祉的取組は主に教会内信徒間支援の仕組みと教会外非信者を支援する取組の二種類に分けられる。それは信徒にとって信仰を実践するための重要な方法である。

都市化の進展に伴い、家庭教会には世代交代が生じている。1990年代、特に21世紀以降に台頭した新興家庭教会は、信徒層の若年化と高学歴化という顕著な特徴を有し、家庭教会研究の焦点となっている。これらの教会は組織形態において従来の閉鎖性を打破し、機能面では単なる宗教集会の枠組みを超え、多様な社会分野にわたる福祉活動を展開し始めた。これは家庭教会の社会的関与パターンにおけるパラダイム転換を示すものである。

しかし、先行研究は教会の指導者の理念解釈や組織意思決定分析に偏り、「リーダー中心主義」の研究枠組みが形成されている。福祉・医療・教育などの専門的背景を有する信徒層——福祉的取組の実践的遂行者かつ体験者としての主体性に関するナラティブは、依然として学術的盲点となっている。この研究空白は、家庭教会の社会サービス実効性に対する客観的評価を制約するのみならず、中国における宗教と福祉の異分野連携に関する理論構築にも障壁となっている。

本研究の研究方法としては、WeChatを用いてオンラインインタビューを行う。2024年の11月と12月の二ヶ月間に、中国における5つの家庭教会の牧師の紹介で、福祉領域、もしくは福祉領域と関わる対人援助専門領域(教育、医療、保健、法律など)に従事している5名の専門職信徒を対象に、1. 信徒になるきっかけと体験; 2. 信仰における家庭状況と人間関係; 3. 職場と信仰との関わり; 4. 教会内信徒間支援の仕組みに対する考え; 5. 教会外非信者向けの福祉的取組に対する考えについて半構造化インタビュー調査を行う。調査対象者の了解を得た上でICレコーダーを用いて録音し、後で逐語録を作成する。

3. 倫理的配慮

本調査は同志社大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会にて承認されている（承認番号 24033 号）。

また、本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

信徒になるきっかけと体験を尋ねた結果、5名の専門職信徒の回答を定性的コーディング分析し、15個コード化単位が生成され、5つのカテゴリに整理された。

信仰における家庭状況と人間関係についての結果、5名の専門職信徒の回答を定性的コーディング分析し、16個コード化単位が生成され、5つのカテゴリに整理された。

職場と信仰との関わりについての結果、5名の専門職信徒の回答を定性的コーディング分析し、7つのコード化単位が生成され、3つのカテゴリに整理された。

教会内信徒間支援の仕組みに対する考えを尋ねた結果、5名の専門職信徒の回答を定性的コーディング分析し、14個コード化単位が生成され、4つのカテゴリに整理された。

教会外非信者向けの福祉的取組についての結果、5名の専門職信徒の回答を定性的コーディング分析し、15個コード化単位が生成され、5つのカテゴリに整理された。

5. 考察

・家庭教会の専門職信徒

家庭教会の専門職信徒における信仰形成は、個人的危機や社会的ネットワーク、神秘的体験など複合的な要因により導かれる。彼らの信仰は感情的要素のみならず、理性的理解と主観的宗教体験により確立される傾向が強い。

福音伝道は家族・友人を中心に展開され、当初は口頭による積極的な伝道が行われるが、思想的対立や社会的制約を受け、やがて行動を通じた証しへと戦略が転換される。

職場では信仰を公にするか否かが環境により分かれ、特に教育分野では制限が厳しい。制度的圧力の下、信徒たちは信仰実践と職業的責任との間でバランスを取り、間接的・長期的な信頼関係を重視した伝道法を模索している。これは現代中国における宗教実践の制約と可能性を象徴している。

・家庭教会の福祉的取組と専門職信徒

家庭教会における信徒間支援の仕組みでは、専門職信徒も他の信徒と同様に「支援の提供者」であり「受益者」でもある。この双方向的関係は、信仰に基づく相互扶助のネットワークを形成している。彼らは信徒としての奉仕精神を優先し、自身の専門性を臨機応変に活用しているが、その多くは一時的・断片的であり、体系的な活用には至っていない。教会側も専門性を活かすための体制やプラットフォームを整えておらず、貢献が個人任せとなっている。さらに、従順や控えめさといった教会文化が、専門職信徒の主体的関与を抑制する一因となっている。結果として、彼らの専門的エンパワーメントは限定的であり、今後は専門性の計画的活用と文化的意識の転換が求められる。

家庭教会における非信者支援は、信徒の信仰実践と社会的責任の交差点に立つ複雑な営みである。特に専門職信徒にとっては、「公益」と「福音」の間の葛藤や、社会的誤解への配慮から慎重な対応が求められる。一部は福音重視、他は福祉を通じた証しを重視するなど、実践方法には幅がある。彼らは個人の信仰には積極的だが、専門性を教会の対外福祉活動に体系的に活かす意識が薄く、結果として断片的な活動にとどまっている。家庭を起点とした地域浸透の可能性も指摘されるが、組織的連携には至っていない。今後、教会内で専門職信徒の資源を統合する仕組みとプラットフォームが整えば、彼らの専門性は非信者支援の大きな推進力となり得る。